

# スリランカ

## 1. 内戦終了後のスリランカ

2010年、スリランカは、内戦終了後の復興への道を進み始めています。2010年1月の大統領選挙に続けて4月8日には、国会議員選挙が行なわれ、右のような結果になりました。

統一人民自由連合 UPFA (与党)	144 議席
統一国民戦線 UNF (最大野党)	60 議席
タミル国民連合 TNA (少数民族)	14 議席
人民解放戦線 DNA (分裂後の野党)	7 議席

投票率は61.26%と、スリランカの総選挙としてはきわめて低いものでした。特に北部ジャフナ県では投票率は23.33%と驚くべき低さで、かつ9議席中、5議席をタミル

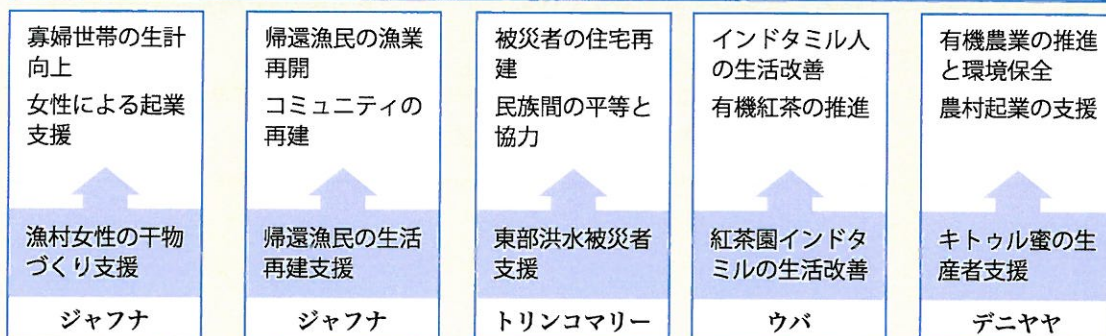
ル国民連合の候補者が獲得しました。最高得票数は、大統領の実弟バジル・ラージャパクサ経済開発相の42万票強で、大統領の長男ナル・ラージャパクサ(24歳)も、父親のハンバントタ選挙区を受け継ぎ全国でも最高の得票率で当選しました。今後6年以内に大統領選挙、国会議員選挙が行なわれる可能性は極めて少なく、これから6年間、ラージャパクサファミリーの時代が続くと考えられます。

スリランカ北部ジャフナでは、戦争が終わり、High Security Zone(高度警戒地域)として長年、住民も入ることが認められていなかった地域の一部が住民に返還されて、10年、20年ぶりに家に帰ることができた人たちは喜びに包まれています。

他方で、一般犯罪が増え、内戦時代よりも治安は悪化しています。内戦の緊張と同時に民族の誇りも失われ、経済復興のイニシアチブを政権与党とそれにつながる有力者に握られたことで、北部の住民たちは戦後の復興から疎外されているという気持ちにとらわれている結果、社会の荒廃が見られます。

### 多文化共生社会の形成へ

#### 農漁村の経済自立のための支援 内戦からの復興／貧困削減／環境保全



パルシックは、ジャフナ半島の住民たちが一刻も早く自分たちの手で生活を再建できることができるように帰還民に漁具を提供するとともに、漁村の寡婦たちを対象として干物事業を再開しました。内戦終結後、多くのシンハラ人観光客がジャフナを訪れています。この観光客たちがパルシックの事業地を訪れて、干物を買っていきます。こうしたモノの交流が少しでも、相互の理解に結び付けてくれることを願っています。

2010年、南部のデニヤヤの事業を開始し、さらに2011年1月に起きた洪水を受け、東部での洪水被災者の支援も実施しています。スリランカの各地での事業の展開によって、パルシックとしてのスリランカの理解も広げていきたいと考えています。

### スリランカ内戦関連年表

1948年	英連邦内自治領セイロンとして独立
1956年	「シンハラ・オンリー」政策（シンハラ語の公用語化）
1972年	新憲法採択、仏教の優先保護化 ----- 英自治領からの完全独立
1975年	V.プラバカラン、「タミル・イーラム解放の虎（LTTE）」設立
1983年 7月	ジャフナで政府軍兵士13人殺害。コロomboほか各地で大規模な反タミル人暴動
1987年 5月	政府軍によるジャフナでの大規模な戦闘開始
7月	インド平和維持軍（IPKF）スリランカ派遣 ----- インドの仲介により憲法第13条修正と州議会法可決（北部・東部州暫定的併合）
1990年 3月	インド平和維持軍撤退。LTTEによる北部・東部占拠へ ----- 再び政府軍とLTTEとが衝突（第2次イーラム戦争）
1991年 5月	ラディブ・ガンディー・インド首相、暗殺される
1996年 5月	ジャフナが再び政府支配下へ
1997年	LTTEが仏歯寺を攻撃。スリランカ政府がLTTEを非合法化
2001年	総選挙で統一国民党（UNP）のウィクラマシンハ首相就任。大統領はSLFP
2002年 2月	ノルウェーの仲介により政府・LTTE無期限停戦合意
2003年 6月	「スリランカ復興開発に関する東京会議」。日・ノルウェー・EU・米が共同議長国
2004年	LTTE幹部のカルナがLTTEより分離。東部で軍事・政治勢力を形成 ----- 12月 インド洋沖津波による被災
2005年 11月	SLFPのラジャパクサ大統領誕生
2006年 7月	マヴィル・アルの水門閉鎖を発端としてトリンコマリで激しい戦闘
8月	ジャフナでも激しい戦闘に
2007年 11月	LTTE政治部門トップのS.P.タミルチェルバンが政府軍の空爆により死亡
2008年 1月	政府が停戦協定破棄を通告
9月	政府、国際機関、NGOにLTTE支配地域からの撤退を指示
2009年 5月	プラバカラン死亡、政府勝利宣言
2010年 1月	大統領選挙：ラジャパクサ大統領の圧勝
4月	国会議員選挙

# スリランカ各地での パルシクの事業 (2010年度)



## 干物づくり支援

内戦の被害を受けた寡婦世帯を主な対象とした、干物の加工、マーケティング指導

2010年10月～2013年9月



## ジャフナ県帰還民 生活再建支援

国内避難民キャンプでの食糧配布、キャンプから帰還した漁民への漁具の配布

2009年8月～



北部州

## トリンコマリー県

ムトゥール

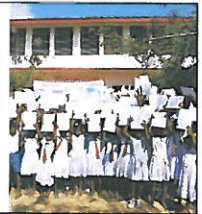
セールウィラ

ウェルガル

北中部州

## 東部洪水被災者支援

2011年1月に発生した洪水で被害を受けた地域への文具、家屋修復資材の配布  
2011年1月～2011年5月




北西部州

東部州

中部州

西部州

コロンボ 

## キトゥル蜜生産者支援

クジャク椰子の花から採れるキトゥル蜜生産工場設備の改良、マーケティング指導  
2010年4月～2011年3月



ウバ州


 ハプタレ

サバラ  
ガムワ州

## ウバ紅茶フェアトレード

有機、無農薬栽培で栽培されるウバ紅茶のフェアトレード、産地訪問を通じた交流  
2008年～



 デニヤヤ

南部州

 事務所所在地

海辺で漁の準備をする人々▶



## 2. パルシクの活動

### 1) ジャフナ県帰還民生活再建支援

スリランカ北部は、23年間の内戦から復興の過程にあります。ジャフナ東部のマルダンガーニ地方は、2009年9月に、ようやく住民たちの帰還が認められました。この地方の人たちは、内戦の激化のなかで1995年に、ワンニ地方とよばれ、当時LTTEが支配していた地域に逃れました。2002年の停戦合意をきっかけに住民たちは帰ってきました。しかし、ほどなく2004年12月、スマトラ沖地震による津波に襲われ、再び家をなくしました。この地方のウドウトウライ村は、約1,500人の人口で270人も津波による死亡者がでています。ジャフナの漁村の人びとの大半が、内戦、そして津波の被害から命からがら逃げ、難民になった経験を持っています。パルシクは、風呂敷包みひとつで帰還した人々に、漁船や漁具を提供し、生活の再建を支援する事業を行なっています。(本事業は、ジャパン・プラットフォームの助成を得て実施しています。)

### JPF スリランカ北部緊急復興支援事業実施内容

ジャフナ難民キャンプ食糧配布事業	2009年8月～10月	食糧の配布	ジャフナ県内の10の難民キャンプ	11,000名
ジャフナ国内避難民の帰還後の生活再建支援事業	2009年12月～ 2010年5月	食糧の配布	ジャフナ県内の2の難民キャンプ	3,000名
		魚網の配布 乾燥台、ナイフなどの配布	クドウトウナイ・オープンキャンプ	213世帯 30世帯
ジャフナ帰還民の生活再建支援事業	2010年6月～12月	ボート・エンジンの配布(リボルビング・スキーム)	ヴァダマラッチ・イースト郡の6村	127世帯
ジャフナ県帰還漁民の生活再建支援事業	2011年1月～ 6月(予定)	ボート・エンジンの配布(リボルビング・スキーム)	ヴァダマラッチ・イースト郡の3村	50世帯
		カトマラム(伝統漁船)・魚網の配布	ヴァダマラッチ・イースト郡の3村	50世帯

### キャンプ内で再会した女性

ジャフナ県内のキャンプをまわった時、2004年の津波後に実施していた干物プロジェクトでウドウトウライ村の女性グループのリーダーをしていた、バヌマティさんと3年ぶりに再会することができました。バヌマティさんは、90年代の内戦で夫を失い、5人の子どもを一人で育てていましたが、津波の時に、妊娠中であった長女とお腹の中の初孫、そしてまだ幼かった末息子を失いました。2006年に内戦が再開した時、彼女は残された3人の娘を連れて、LTTE支配地域であったムライティブへ逃れました。そして2009年内戦の末期に再び娘たちを連れて戦火を逃れ、ジャフナへやってきたところ、キャンプに收容されたのです。現在バヌマティさんはウドウトウライ村に戻り、2010年に再開した干物プロジェクトに再び参加しています。



左端がバヌマティさん(ウドウトウライの女性メンバーミーティングにて)

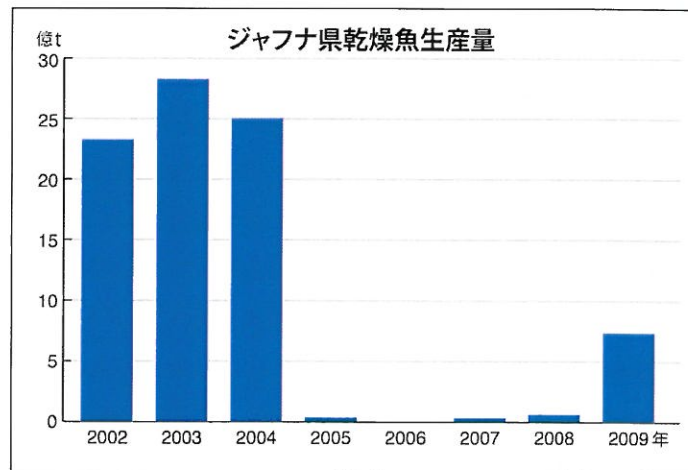
キャンプに收容されたのです。現在バヌマティさんはウドウトウライ村に戻り、2010年に再開した干物プロジェクトに再び参加しています。

## 2) 干物づくり支援

スリランカのジャフナ県は、水産物の水揚げがスリランカーで、漁業の活発な地域です。

地図を見ても三方を海に囲まれているうえに、内海や湾が複雑な地形を構成していて、随所にすばらしい漁場があることが分かります。しかし、電気は町の中にしか来ず、製氷施設もほとんどないので水産物の鮮度をたもつのは難しいことです。

そのような環境の下、干物づくりが発達しています。日本でも昔、保存用に塩辛い干物をつくっていたのと同じです。スリランカの人たちは、この塩分が多く、カチカチに乾燥させた干物を水に戻して、油で揚げたり、カレーに入れたりして食べます。ジャフナの干物はスリランカの各地で人気があります。



ジャフナの漁村は寡婦世帯の数が非常に多く、例えばカライナーガルという村は、人口 575

世帯の村なのですが寡婦世帯は 175 世帯にも上ります。パルシックは、この寡婦世帯の女性たちが協力し合って、質の高い干物をつくり、コロomboなどの大都市に販売することを支援しています。日本の干物づくり専門家を派遣して、従来の製品より塩分の少ない干物づくりを教えています。近年、成人病に悩む人口が増えているスリランカ都市部では、塩分の少ない食品などに人気が集まっているので高価に売ることができると計画しているのです。2010年度は、ジャフナ県内の4村で、およそ30人の女性たちが、干物作り研修に参加しました。(本事業は、JICA草の根協力事業パートナー型の支援を得て実施しています。)



トゥンパライ・イースト村での研修

### 参加女性の背景

良質な干物の生産、販売で収入を増やし、家計を楽にしたいとの願いをもった様々な女性たちが、乾燥魚事業に参加しています。その中の一人、トゥンパライ・イーストで女性グループのリーダーを務めるテンモリさんは、干物による収入で長年家族を養ってきた女性の一人です。現在43歳のテンモリさんは21歳で結婚し、すぐに娘さんを妊娠しましたが、それから間もなく夫は戦争で行方不明に。その後夫からの連絡はなく、20年以上経った今も消息は知りません。この間、干物を作り、その販売で得た収入で娘さんを養ってきました。これまでの経験を生かして、グループのより若い女性たちの助けになってくれると期待しています。



テンモリさん

### 3) キトウル蜜生産者支援

南部州に位置するデニヤヤはスリランカに残された熱帯雨林、シンハラージャ環境保護区に隣接する山間地帯です。急斜面であるため稲作や一般の畑作が困難なことから、英国植民地時代に開始された紅茶栽培が唯一の現金収入源でした。中東で人気の、水色の濃い紅茶、ルフナ紅茶の産地にあたります。しかし、主な輸出先である中東の政情不安と世界的な不況下で紅茶産業は沈滞しているのが現状で、小農民にとっては、紅茶生産だけの収入では生計を立てることが難しくなっています。

この地域の伝統的な産業であるキトウル蜜(クジャク椰子の花蜜)生産に着目し、この蜜に付加価値を付け販売する事業を行いました。各農家が、木に登り花のつぼみを薄く切り取って集めた花蜜を使い、伝統的な製法でキトウル蜜を生産していましたが、デニヤヤは山深い地域であるため、農家まで訪れる仲買人にその言い値で販売するしかなく、非常にわずかな収入源にしかありませんでした。このキトウル蜜の生産を支援し、添加物のない純度100%の製品をブランド化してコロomboなどの大都市に販売することを目指しています。約50世帯が活動に参加し、合計800本のキトウル蜜を製品化、市場に販売しました。工場生産されコロomboなどのスーパーマーケットに出回っている大量生産のキトウル蜜は、砂糖や人口甘味料が添加されているため、添加物のないデニヤヤの商品は人気を博しており、今後、スーパーやホテル等の大型店舗にも販売を拡大していく予定です。(本事業は、国際ボランティア貯金の助成を得て実施しました。)



▲共同加工場にて完成したキトウル蜜



▲ヤシ蜜を採取する男性



文具配布を行ったムトゥール郡の学校

#### 4) 東部洪水被災者支援

1月初旬と下旬に起こった洪水で、被害の大きかった東部のトリンコマリー県南部を対象に2つの事業を行ないました。1つは新学期開始前に文具が洪水被害にあってしまったムトゥール郡の学校16校の生徒3950人を対象とした、ノートやペンなどの教育用品の配布、もう1つはウェルガル郡とセールウィラ郡で全壊もしくは半壊した家屋あわせて150軒を対象とした、セメントブロックや木材等の簡易住宅の建設資材の配付です (p.14 地図参照)。

1度目の洪水の後、すぐに支援を開始しようと準備を進めていたところ2度目の洪水で支援地へのほとんどの道路が冠水し、現地に入れなかった状態が続きました。雨が上がり道路の状態が回復し、教育用品を持ってムトゥール郡に入ることができたのは、洪水から1か月半が経ってからのことでした。

2校はまだ教育用具を積んだトラックが通れるような道ではなかったので、近くの施設まで運び学校の先生に取りに来てもらったのですが、残り14校については学校へ行き、生徒に手渡しをし、2月21日、無事に全ての学校への配布が終了しました。

資材の配布についても、雨のために基礎コンクリートの材料である砂が採取できなかつたり、セメントブロックが作れなかつたりして、時間が過ぎるのももどかしい思いで過ごすだけでしたが、3月中旬、予定していた全150世帯への資材配布を終了しました。引き続き、新たな57世帯を対象にした資材配布を行なっています。(本事業は、ジャパン・プラットフォームの助成を得て実施しています。)



洪水で損壊した家屋

# マレーシア

## 沿岸漁民による海洋環境保全支援

PIFWA (Penang Inshore Fishermen Welfare Association) は地域で沿岸漁業を行なう漁民が中心となり、環境保護に自主的に取り組んでいる、アジアでも稀有な市民活動団体です。近海や河川でエビ、カニ、貝や魚を獲る漁民たちが、ボランティアで活動に参加しており、現在の会員数は約30名。排水による沿岸の水質汚染や、自然災害による被害など、各地域の漁民が抱える問題を、一緒に解決しています。

地域の開発や水質汚染によって失われたマングローブ林の復活をめざし、1994年にマングローブ植林事業を始め、現在に至るまで、ペナン州だけで、16万本の苗木を植えてきました。現在は、PIFWAメンバーだけでなく、地元で工場を持つ企業のスタッフや学生など、様々なセクターからの参加があります。マングローブの林は、カニや巻貝など、漁民にとっての収入源の宝庫でもあります。様々な生態系の棲家となるだけでなく、渡り鳥の寄宿地にもなるマングローブ林。2004年の津波の後には、災害から人びとの暮らしを守る防波堤の役割としても注目を集めています。

2010年度は、この漁民団体 PIFWA が行なう、植林事業の支援を行ないました。約1,000本の苗木が植林された他、地域の小学生や企業を対象としたマングローブと生態系に関するワークショップ、展示会を開催しました。2011年に入ってから、地域に見学を訪れる人々が学ぶための教育センターの建設も始まっています。これからの未来を担う、若者たちに、ぜひたくさん活動を見に来てほしい、と、PIFWAのメンバーは語っています。今年は残念ながら、催行人数に達さず、ツアーとしての訪問が叶いませんでしたが、12月にはスタッフによる現地訪問を実施しました。今後も、PIFWAと協働し、開発と環境の問題に取り組んでゆきます。(本事業は、イオン環境財団の助成を得て実施しました。)



▲ 2008年に植林をした林の点検を行う PIFWA メンバー  
▼ 2010年に植林をした林





## フェアトレード

パルシックは、対等な取引を通じて、人と人のつながりと信頼を広げていくことが紛争の抑制、平和の構築、そして人びとの暮らしの向上に寄与すると考えています。フェアトレードを通じ、『地球に暮らす人びとが対等、平等に生きることができる社会』の実現を目指しています。

今年は、本格的にコーヒーや紅茶を販売して3年目の年でした。新たに募集した営業ボランティアチームとともに小規模店舗への営業に取り組みました。夏に3回の勉強会を行ない、夏の終わり頃から焙煎店への生豆販売に力を入れ、結果、新たに十数店のお客さまが生豆を購入してくださっています。毎週2～3名のチームで都内23区を中心に活動しています。メンバーは学生の方が多く、学業や就職活動等、忙しい時期が重なりましたが、皆意欲が高く、大変な中でもイベントやミーティングなど積極的に関わってくださっています。

### ●コーヒー

ロブスタ種を生産しているサココ生産者組合が加わり、2010年度、東ティモールから日本へ届いたコーヒー（生豆）は合計約56トンに達しました。今年、入荷したサココのロブスタ種25.05トンは、ロブスタとは思えないクリーミーな味と好評をいただいています。今年の入荷分はすべて、フェアトレードに取り組んでいるファーストフードチェーンの株式会社ゼン



◀パルシック東ティモール豆を取り扱う Café Sucré (東京都墨田区)

▼モリバコーヒーにてリキッドコーヒー販売開始



▼自家焙煎 café ちゃんと (東京都文京区)





ショーに買っていただき、同社の喫茶店チェーン、モリバコーヒーでアイスコーヒーとして販売されています。

ココマウが今年生産したアラビカ種の生豆35.91トンは、16.5トンをATJ（オルター・トレード・ジャパン）に販売し、19.41トンをパルシックが輸入しました。定番の商品、カフェ・ティモール粉タイプ8,700パック・豆タイプ5,000パックを筆頭に、ドリップパックは4,500箱、初夏から販売を開始したリキッドコーヒーは昨年の1,800本を大きく上回る2,800本を売り上げました。



#### ●ウバ紅茶

ウバ紅茶は今年も引き続き、リーフタイプとティーバッグタイプを販売しました。今年度はリーフタイプが2,000パック、ティーバッグタイプは3,600パックの売り上げがありました。ウバ紅茶はクセが少なく飲みやすい、まろやかな味わいであることから、紅茶通の方だけではなく幅広い方々に飲みやいと好評です。



#### ●ハーブティ

東ティモールの女性支援の一環で始まった食品加工のうち、ハーブのフェアトレード商品化を予定しています。春から夏にかけて、栽培の可能性を探りながら数種類のハーブの栽培・加工を試し、何度も試作しました。現在ツボクサとミント、バジルの花、ライムリーフなどのハーブティを初夏頃の販売開始を目指して商品化を進めています。

# 広報

## 1) 国際協力ニュース

活動地の状況やパルシックの活動を会員、賛助会員、サポーターズ、寄付者、カフェ・ティモールやウバ紅茶の購入者の方々にご紹介するニュースレター、「国際協力ニュース」を今年も6月と12月の2回、発行しました。これからも東ティモールやスリランカ、マレーシアの人びとの声をのせてお届けします。

## 2) ウェブ

2010年末から、ホームページのリニューアルに取り組んでいます。JICAの「組織力アップ！NGO人材育成研修」により博報堂からアドバイザーを派遣していただき、分かりやすく利用しやすい構成であること、新しいプロジェクトや刻一刻と変わる活動地の最新の情報を発信するサイトであることをめざし、4～5月の完成を目標に作業を進めています。



地球ひろばでの写真展

## 3) 東ティモール写真展

5月のフェアトレード月間にあわせ、「東ティモール：フェアトレードコーヒーができるまで」と題した写真展を、JICA地球ひろばのイベントホールにて開催しました。東ティモールの文化やコーヒー生産の様子を、写真で紹介しました。この写真展を受けて、仙台や岡山など、各地のイベントでも、同じ写真を使ってパルシックの活動を紹介していただきました。

## 4) 各種イベントへの参加

より多くの方にパルシックの活動を知っていただくために、今年も「アースデイ」や「グローバルフェスタ」、「土と平和の祭典」、「エコプロダクツ展」をはじめ、多くのイベントに参加しました。可能な場合には、コーヒーや紅茶を入れて、サービスをしています。直接、お客様と言葉を交わし、コーヒーの背景などに関して説明させていただける良いチャンスとなりました。

▶グローバルフェスタ JAPAN2010  
(10月日比谷公園)にて



## 5) エゴ・レモス氏コンサートと映画試写会

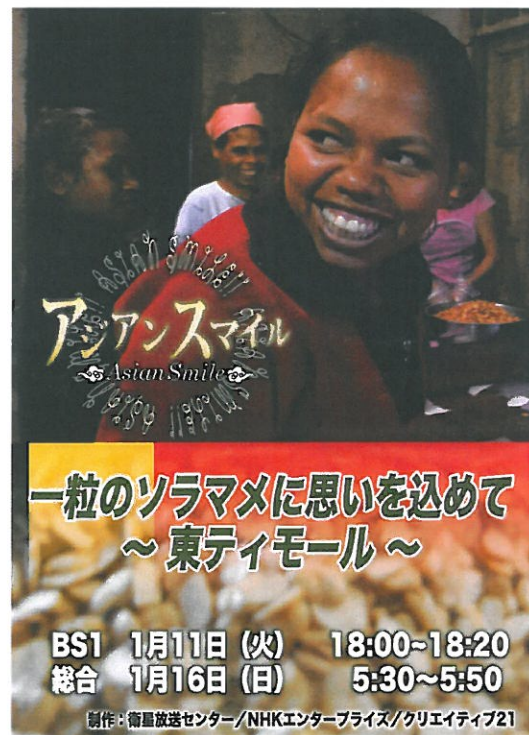
11月3日、パルシックが主催して、東ティモールのミュージシャンであるエゴ・レモス氏のコンサートとドキュメンタリー映画『CANTA! TIMOR』の試写を同時に行なうイベントを築地本願寺にて開催、約90人の方々のご参加をいただき、盛況となりました。2012年は、東ティモール独立10周年であると同時に、パルシックのコーヒープロジェクトも10年を迎える節目の年なので、記念イベントを行なうことを企画しています。



築地本願寺でのコンサート

## 6) メディアによる報道

東ティモールで行なっている女性たちの食品加工プロジェクトの活動が「アジアスマイル」というNHKの番組で1月11日、16日の両日、放映されました。テレビの取材を受けたことは、東ティモールの山の中で暮らす女性たちにとって一大イベントで、女性たちの自信にもつながりました。日本の多くの市民が、彼女たちの暮らしや仕事にふれる良い機会ともなりました。



# パルシックのめざすもの

## 【背景】

私たちの生きている21世紀の世界は、さまざまな矛盾に満ちています。前世紀以来の工業化や近代化の結果、経済的な格差の拡大、天然資源をめぐる利権と乱獲、環境破壊が深刻化して、局地的な戦争の多発、民族抗争の激化などを引き起こしています。それに加えて、自然災害などの被害も大規模化しています。

パルシックの前身であるアジア太平洋資料センターは、1973年の設立以来35年間、第三世界の人びとと対等平等な関係をつくり出すことを目的としてきました。自らが変わり、日本を変えることを通じて、第三世界の人びとと共に生きていくことをめざし、その時々必要性に応じてさまざまな活動分野を担ってきました。

90年代後半からは、具体的な現場活動として、民際協力分野を模索し始めました。タイの河川流域での環境保全・住民のネットワーク組織を手始めに、1999年の東ティモールでのインドネシア国軍・民兵による暴虐に対抗しようとした東ティモールへの協力活動をもってこの分野での活動を本格的にスタートさせました。さらに2002年のスリランカにおける停戦合意という事態を受けて、少数民族の居住地である北部の漁民支援を始めました。2008年、アジア太平洋資料センターから分割したパルシックのめざす世界も、これまでアジア太平洋資料センターが取り組んできた活動経験を基礎にして、その延長線上に展開します。

## 【理念】

新たに発足するパルシックがめざす民際協力は、地球上の各地で暮らす人びとが国民国家の壁を乗り越えて、直接的に助け合う世界です。同じ時代に共に生きる人間として、相互に支え合う道を拓きます。いうまでもなく、主権国家相互の国際関係、その連合組織としての国際機関などを無視することはできませんが、直接的かつ自然的な関係であると同時に人間的で対等な関係作りに参画します。

眼前の世界の現実には、異なった地域に暮らす人びとが、自ら当事者として取り組み、共同作業することを求めています。違った体験を持つ多様な人びとが、多角的な視点から、多重に多元的に協力してこそ、新しい主体を形成できます。老若男女の地域住民が社会の主人公として、自分たちの生き方を決め、豊かな暮らし築く世界をめざしましょう。

## 【手段・方法】

そのような世界へ至る手段は、ひとつだけではありません。異なった条件のもとでは、異なった対応が必要です。人間社会のもめごとには、多くの要因や相互作用が絡んでいます。それを解きほぐすには、丹念な探究が不可欠です。私たちは、地域の現実に即した調査活動を行います。そして積極的な解決案を模索します。

いかなる紛争の現場にも、暴力の匂いが付きまっています。あらゆる戦争が軍事力の行使である以上、パックス・ロマーナに始まる世界の歴史が示すように、世界の平和もまた軍事力によって達成されると信じられてきました。しかしながら、パルシックはそのような手段を採用しません。非暴力的な方法による、紛争解決の道をめざします。

私たちは、必要とあれば紛争の現場に赴き、その歴史的社会的な背景や問題点を関係者から丁寧に聴き取り、いかに特殊な問題であっても具体的な生活の課題に即した解決案に取り組みます。その方法は、武力抗争の対極にある、交流、交換、交信、交易などの営みです。

パルシックの活動は、直接的な交流、交易を重視します。商品の生産、流通、消費などが、市場の価格だけを判断基準にするのではなく、人間的な交流と信用に基づくことを大切にします。交換を通じて、商品だけでなく双方に欠けているものを互いに補います。そして、できるだけ多くの交信手段を使って相互理解を深めます。交易も、「すべての当事者が対等な立場から適正な利益を得る」フェア・トレードに力を入れます。このような活動こそ、民族抗争や地域紛争が引き起こす民衆の困難を解決する道だと信じるからです。

これまで土地売買の自由化、低賃金労働力の国際移動、そしてなによりも金融市場のグローバル化が、凶悪な力となって、人びとの生命と暮らしを破壊してきました。そのような潮流に対して、パルシックの活動は、「暴力と戦争」から「対等な交易と協力」への方向転換をめざします。